川上　高司　ブログ　アーカイヴ

2014年

11月11日

世界を振り回したビッグフォー

米フォーブス誌が、今年もっともパワフルだった人々のランキングを発表した。同誌が毎年発表しているランキングだが、この「powerful」の意味は力を行使して世界に影響を与えたという意味で、その行使の結果の是非は問わない。要するにどれだけ世界を振り回したか、という評価である。そのランキングを辿ってみると 2014 年の世界をふり返ることにもなる。

今年堂々の 1 位に輝いたのは、ロシアのウラジミール・プーチン大統領である。このランキングに異論を挟む余地はないだろう。ウクライナとの紛争、クリミア半島の編入からヨーロッパとの不仲をひきおこし､アメリカとの協調関係にヒビを入れた。欧米の対露経済制裁にも屈せず、中国との天然ガスの大型契約を締結して見せた。ロシアの地政学が復活したかのような、プーチンの一人舞台だった。

第２位は、昨年に続いてアメリカのバラク・オバマ大統領である。先日の中間選挙では大敗を喫したが、世界の舞台ではいまだその力は大きい。ＩＳＩＳへの空爆開始で再びイラクで戦争が起こるのか、という不安を世界に巻き起こした。戦争をしてもしなくてもアメリカは世界を振り回すのである。

第３位は中国の習近平国家主席である。外交では上位２名ほどの目立った成果を上げてはいないが、ロシアとの大型契約を締結してユーラシアのハートランドの存在感を示すなど影響力は抜群である。

第４位はやはり昨年同様ローマ法王である。世界のカトリック教会の頂点に立つ法王の影響力は政治とは別の意味で大きい。

そして第５位も昨年同様ドイツのアンゲラ・メルケル首相である。ウクライナ問題でロシアとヨーロッパが対立する中、プーチン大統領からの信頼が厚い同首相はロシアとヨーロッパの橋渡しをして関係悪化を食い止めるべく尽力した。その政治的手腕はいまだ健在である。もちろん、世界でもっともパワフルな女性のトップでもある。

ここ数年、上位５名は順位の入れ替わりはあるものの、顔ぶれは変わらない。この４カ国を中心に世界は動いているとも言えよう。

11月14日

Iオバマ大統領の書簡外交ーハネメイ師への熱い期待

イランの高官は、オバマ大統領からイランの最高指導者ハネメイ師あてに手紙が届いた、そして返事を送ったと公表した。イランとアメリカは 1979 年のイラン革命以来国交は断絶、昨年からは宥和路線に転換しているが、オバマ大統領就任以来 4 通目の親書だという。

手紙の内容は当然ながら詳しくは公表されていないが、イラン側によればイランの核開発の問題が中心だったという。だがそれだけではなかった。さらに踏み込んでＩＳＩＳ問題についても言及があったという。

イラン側の発表によればアメリカとイランはＩＳＩＳ問題では共通の利害を持っているので協力関係を築くことも可能だとオバマ大統領は主張しているという。ただし、六カ国協議でイラン核開発問題で決着がついた暁には、という条件がついていた。

逆に言えば、ＩＳＩＳ問題でイランの協力が得られるなら核問題で譲歩もあり得るという可能性を暗に示しているともとれる。それほどＩＳＩＳ問題は行き詰まっているということに違いない。

イスラエルによれば、この外交文書はイスラエルも他のアラブ諸国も知らないうちに届けられたという。イラン外交に関してはアメリカはかなり本気である。六カ国協議以外にも、アゼルバイジャンでイランとアメリカがこっそり会合を開いてテヘランにアメリカの貿易事務所の開設を話し合うなど本格的な外交の復活の準備に余念がない。

だが、イランでのアメリカへの不信が消えたわけではない。「メディアではオバマ大統領はなぜイランを容赦なく非難するのか。親書ではフレンドリーなのに」と、イラン国会の議長はオバマ大統領の真意を測りかねて困惑している。イランでは、要人の発言が公私で異なるなど「あり得ない」からだという。こうなるともはや文化の違いとしか言えない。

ネット時代で要人の言動は瞬く間に世界を駆け巡る。もちろんオバマ大統領は自らの発言の効果を計算している。だからこそ繊細な部分は書簡という古典的な手法を用いるのだろう。外交の極意はやはり手紙にあるに違いない。

11月28日

ヘーゲル国防長官の辞任の余波ーオバマ政権の行き詰まり

11 月 24 日、ヘーゲル国防長官の辞任が発表された。ISIS との闘いやエボラ出血熱問題、まもなく終了するアフガニスタンからの撤退など難問が山積みの最中の辞任に動揺は隠せない。しかも中間選挙で民主党が大敗を喫した直後である。民主党政権にあって唯一の共和党であるヘーゲル国防長官の辞任は憶測を呼んでる。

チャック・ヘーゲル氏が国防長官に就任したとき、国防費の削減とそのための議会工作、外交政策の立て直しが期待されていた。特に外交政策では、外交優先で国務長官が外交を主導するという立場を明確にするため、ヘーゲル長官自身が「ケリーの時代だ」と言い切り国防総省は舞台裏にまわり予算削減と改革に取り組んでいた。

だがウクライナ問題でロシアとの関係が悪化し、さらにいまや ISIS の勢力が拡大しアメリカは派兵をするかどうかの決断を迫られている。デンプシー統合参謀本部議長が 11 月初旬の下院での公聴会では派兵に前向きな姿勢を示す一方で、ヘーゲル長官は「派兵はありえない」と否定し、軍部との不協和音も表面化している。

ヘーゲル長官は前ブッシュ大統領がイラク戦争を始める時、強硬に反対した。そのヘーゲル長官が再びイラクへと派兵をし「戦時長官」となることは、信念を曲げることになる。信念は曲げられない。戦争は二度としないとの強い思いをもつベトナム帰還兵である彼は、10 月下旬には辞任を大統領に申し入れていた。

おそらく自身の信条に近いヘーゲル長官の辞任を受け入れることはオバマ大統領

にとっても、厳しいことだったに違いない。オバマ大統領は米軍は派兵をしないという方針を貫こうとしているが、ヘーゲル長官の辞任でその外交政策の転換は不可避となる可能性がある。

すでに次期長官候補が取り沙汰されている。初の女性長官となるかもしれないと期待されているミッシェル・フロノイ氏は早々に就任の可能性を否定し、他の候補も「関心がない」とつれない。オバマ政権の対 ISIS 政策は転換が求めらておりより強硬になれば派兵し再び泥沼の戦争へと行き着きかねない。要するに誰もババを引きたくない、というのが本音であろう。それほどに外交政策は行き詰まっているのである。